

2012年9月17日
0:19

勇者「魔王！ お前を殺して、オレも死ぬ！」

1 名前: 赫焉焰 07/25(水) 16:33:03 ID: ceuVG 44

$\Delta \tau_{\text{eff}} = \tau_0 - \frac{\tau_0^2}{T} + \dots$

(教会)

あ、はい。自己紹介ですね。

魔法使い女のカナエです。レベル29です。

得意なのは炎系の攻撃魔法です。きゅつとしてど

か
し
ん。

同職の人たちの中でも割と強い方だと自負してま

す。なんととっても、ディシーニール・ユアン王国が誇る、魔王討伐の任務を任された勇者様のパーティに同行しているのですから。

勇者様の人柄ですか？ 偉大な方ですよ。勇者様は戦士のアキさんと前列に立って、魔物の攻撃をものともせず立ち向かっていくんです。非力な私や僧侶のミズさんが攻撃を気にしないで魔法を使えるのは、お二人のおかげなんです。

勇者様はいつも「怪我はない？」とか、「オレが守るから！」とか言ってくれて、すごく優しくして……とっても頼りになります。なんだか、親近感が湧いちやうな。えへへ。

おつとと、勇者様たちが歩き始めましたね。急がないと遅れちゃう……！

待ってくださいよ！

いくら最後尾だからって、私の存在を忘れてるわけではないでしょうね！

……って、あわわ。教会の中で騒ぐのはよくないですつ。

神父様に嫌われなければいいなあ……。

(昼、草原)

一列に並んだ私達は、街の外へ一歩踏み出す。いつもの景色だ。一面に生えた草と、アクセントのように点在している木々。空はほどよく透明な青色で、時々吹くそよ風。ピクニックに来たように錯覚しそ

魔物さえいなかったならば、本当にそう信じてしまえるかもしれない。

……なんです。私の前口上に文句でも？

そうですか見ればわかりますか。じゃあもう景色の説明なんてしませんよ。ふんつ、だ。

ん、安心してください。別に機嫌が悪くなったわけじゃないんです。ただ、やっぱり自分にこういうことのセンスがないことが改めて実感されちゃって……はあ。

あ、今の目的ですか？ 旅はもうそろそろ中盤の終わり、といってもいい気がします。えっと、魔王城自体は発見できているんですよ。ただ、突入するのに七つのオーブが必要で……。

そういうわけで、世界各地で暴れている魔王の配下をシメて回って、オーブの手がかりを探している最中なのです。

……つとと、魔物のお出ましですね！ 勇者様、前はお願ひします！

そんなに強い奴でもないですね。三匹いますけど、今の私達なら敵じゃないですよ。あ、勇者様がオーバークルした。さっすが！

私も負けてはいられません！ 喰らいなさい、全体攻撃『灼熱波』！

（夜、草原）

んん、お腹すいたな。

身体の疲労もかなりのものになってきていたので、手ごろな場所を見つけて野宿をしています。

とはいえ、最近は勇者様が魔法で野営地を快適かつ安全な場所にくださるので、実質的には宿屋で泊まるのとそこまで変わりません。流石勇者様、

と言うべきでしょう。

私というと、焚火係兼料理係としての役割を果たすべく、現在魔法を駆使してカレーを作っています。今日倒した巨大カラスの肉をじっくりコトコト煮込むのです。もう少しでいい塩梅ですかね？

ふふふ。熟達した魔法使いは料理も魔法でちよちよいのちよい、です。

……しかし、アキさんやミズさんは本当に何もしてませんね。あの二人はご飯を渡しても食べませんし。というか、私は二人が何かを食べているところを見たことが無いです。

お人形じやあるまいし、どうやって生きているんでしょう……んん、今度聞いてみましょうか。いやしかし、話しかけても返事してくれませんし――

「カナエ」

あれ、勇者様。どうしました？ ご飯ならまだで

すよ。

「いや、そうじゃない。なんだか最近おかしくないか？」

……おかしいって、何がですか？ 私がですか？
そう言うと、勇者様はんーと唸って首をかしげました。腑に落ちていないようです。いったい何を悩んでいるのでしょうか。

頭上でカラスがカーカー鳴いています。もう辺りは真つ暗闇で、普通の鳥ならおねむの時間でしょう。この地方の鳥は鳥目じゃないのかな。

ばさばさという羽ばたきの音も、普段なら気にとめないものですが、私の心に微かに落ちた不安の影が、そこにある種の予兆を感じさせます。

危機。

それは気づかないうちに私達の背後に這い寄り、僅かな隙間から内に侵入し、身体を蹂躪し、心を犯し、人を食い破るのです。

私の予感ほわりと当たりますし、勇者様に伝えるべきかもしれません。

ですが……ただでさえ心労の多い勇者様に、あやふやな根拠でこれ以上負担をかけるのは、気が進まないです。

だから私は――

「なにも、ないですよ」

そうやって、笑顔で答えたのでした。

……あ、カレー沸騰してる。

（数日後…昼、山道にて）

草原の先にあつた山を超えて、さらにその先の平地にある街に到着しました。しかし、そのあたりの魔物がなかなか強いので、大事をとってレベル上げ

をしています。とりあえずのところ、なんとか私はレベル33になりました。アキさんとミズさんもレベル34になって、お二方ともますます頼もしくなりました。

ですが、少し気になることがあります。他ならぬ勇者様のことなのですが。

いつのまにか、何故だか勇者様は一人でぶつぶつ言っていることが多くなりました。さながら誰かに話しかけているかのようにです。突然笑い出したり、なんだかいじけた様子になっていたり。

最近はそれが更に悪化したように思います。寝不足のようでくまが目の下にできていますし、暗い雰囲気を出してばかりです。

レベルも上がったし、そろそろ先に進んでもいいと思うんですけどねえ……。

と置いていたら、急に勇者様が歩き出しました。いつもの如くアキさんとミズさんがそれに続きます。最後尾の私も急がないと！

ようやく先に進む気になってくださったのでしょうか。もしかしたら、元気が出たのかもしれない。よかったよかった。勇者様に万が一のことがあったら、私達どころかこの世界の人々みんなが困ってしまいますから。

なんといっても勇者様は勇者様。腕力も魔力も常人のそれらと比べることは恐れ多くてできませんし、何よりもカリスマがあるのです。勇者様ご一行というだけで待遇が違いますよ。宿屋なんかいつでも空き部屋がありますし。不思議ですよねえ。

アキさんとミズさんは、いつものように黙々と歩いています。妙にお喋りになった勇者様のせいで、この二人の寡黙ぶりがさらに際立って見えるのです……なんだか空気が重いなあ、うう。

それにしても、まだ街に着かないのでしょうか。いつもならもうとっくに到着してるはず、いやそれも——あれ？　なんだか、山を下るところか、ど

んどん登っているような。

というか……もう、崖にたどり着いてますよ？
勇者様。

街に帰りましょうよう。あったかいベッドでおやすみして、早く魔物を倒しに行きましょう。ね、勇者様。

……勇者様？ なにをなさるおつもりですか？

——つ三

な、何をしてるんですか！

ああもう暴れないでください！　なんで、なんで、なんで、いきなり崖から飛び降りるなんて真似をなさるのですか？　勇者様がいなくなったら、誰が魔王を倒すんですか！　そもそもどういう理由があつてそんなことをするんですか！

……生きていたって仕方がない？

未来は必然？

どうせ何をしてもうまくいつてしまう？

みえないだれかにみられている？

わけのわからないことを言わないでくださいよ！
未来予知とかその辺は賢者の領域です！　いくら勇者様だからといって、そんな魔法は使えるわけがないでしょう！

……はい？　今何を言いました？　よく聞き取れなかったんですけど。

なんのクセに、ですか？

つて、ああああもう、手を離そうとしないで！　暴れないでったら！

て、て、手汗が！　手汗で滑る！　アキさんなんです手伝ってくれないんですか——あつ、手が、離れ、て、私は、後を、

「勇者様あ————つ三」

(???)

「おお ゆうしゃよ しんでしまうとはなさない」

目を覚ますと、天井が眼前に迫っていました。私は今、一人が入るので精一杯の部屋の中にいます。

腕を動かそうとしたら、耐えがたい痛みが走りまわりました。発狂しそうになって声をあげようとしたが、声帯も震わすことができません。これはいったいどういうことでしょう。

確か……山道で、勇者様がいきなり崖から飛び降りようとして……私がなんとかその手を握って……でも引き上げられなくて、それで勇者様は落ちて……

……その後、足が……勝手に……勝手に……何を？

ダメです、思い出せません。そして今気づきましたが、これ目玉も動かせませんね。目の前の天井から目を離せないです。うう、辛い。なんとかこの忌まわしい壁を打ち破れないか。

——ん、あれ？ なんだか天井が動いているような。手を伸ばします……つて、なんで身体が動かせないのでしょう？ 動かせなかったのも謎ですが、いざ動かせるとなるとそれはそれでやっぱり謎ですね。まあ理由などどうでもいいのです！ 今こそこの小部屋から開放されるとき！ んぬうつ——つ、まぶしっ！

「無事蘇ったか。なあ、カナエよ」

天井をどかして視界に入ってきたのは。教会のステンドグラスと、勇者様の顔でした。

「オレ、死にたいよ」

勇者様はそう言って、私の頬に雫を落としました。

（数週間後…山道）

あれから勇者様はすっかり元気をなくして、ずっと宿屋の一室にこもっています。お金は潤沢にあるので心配する必要はないのですが……勇者様は大丈夫でしょうか。

アキさんもミズさんもずっと出て来ません。だから私は一人でこうして、容易に倒せる魔物を狙い撃ちして、さびしくレベル上げ作業をしています。勇者様の再出発に備えて。

昼は魔物を殺し、夜は宿屋に戻って眠る。それだけの日常。旅は止まっています。それなのに、誰もそのことを気に病みません。街の人は皆、勇者様に

任せればそれで大丈夫と言っています。宿屋にいる人たちでさえ、もうすぐ勇者様が魔王を倒してくれると固く信じ込んでいるようです。

初めて彼らと出会ってから、ずっと同じ事を言っているようにさえ思えてきて、それが私を苛立たせます。

ん、あれは魔物ですね。『インフェルノ』。ハイ終了。経験値ゲットです。あ、レベル45に上がりました。キリがいいので、もう宿屋に戻りましょう。……勇者様、元気になってるといいな。

（宿屋）

私は宿屋に着くと、いつものように勇者様の部屋の扉をノックします。せめて話だけでも聞きたい。そう思って、勇者様が扉を開けてくれることを願って、コンコンコンと、三回。大概の場合はなんの返

事もなく、肩を落として自分の部屋に戻る羽目になるのだが。

さて今日も私は勇者様の部屋の前に立っています。すーっと深呼吸。そしてノック。

コン、コン、コン。ガチャリ。

ガチャリ？

扉が開くやいなや、私は部屋に引つ張りこまれました。ちよつとちよつと待ってくださいよ勇者様が部屋に入れさせてくれたのは嬉しいのですが強引にするのはやめてください怖い怖い怖い！

しかし身に危険が及ぶことはなく、勇者様は私に椅子に座るように促すだけでした。頭上に浮かんでいるであろうハテナマークで勇者様を叩きたいような気分でしたが、私は黙って指示に従います。

「聞け、カナエ！」

はい。

「オレは旅を続け、魔王を倒すぞ！」

……は、はい！

「そして人生の終焉に達しないエンディングを迎える！『FIN』の文字が表示されさえすれば、オレは役割を失って、安らかに逝けるに達しない！」

……は、はい？

「魔王！ お前を殺して、オレも死ぬ！」

とりあえず、旅は再開されるようです。よかった。ですが……勇者様って、ホントは頭のネジ、ゆるいのでしょうか。

（魔王城）

……本当に、終わったんですね？ 間違いありませんね？ 第四形態とかないですよね？

私達は、力を結集して、魔王を倒しました。これで魔物も出現することはありませんし、それによって苦しむ人も、もう出ません。

勇者様は、とても安らかなほほ笑みをたたえて、ぶつぶつとひとりごちています。何故でしょうか、私の中にあった勇者様への忠誠心、尊敬、陶醉といった念は、いつのまにか消え失せていました。

「やった……これで、死ねる」

死ぬんじゃねえよ。

だいたいそんなに死にたいのならさっさと魔物に刺されるなり崖から飛び降りるなりすればいいじゃないですか。どうせ崖にピョーンしたときも途中で怖くなって必殺・反重力魔法を使うなりして生き延びたんでしょう？ なんなんですかあの人は……。

ね？ あなたもそう思うでしょう？

まあこんな時ぐらいは許してあげますか。さあ凱旋です！ 我らが故郷へ帰りましょう！

（エンディング）

「ゆうしゃよ よくまおうをとうばつしてくれた
これでせいかいはすぐわれるだろう」

ああ……本当に、旅が終わるんですね。もう魔物にインフェルノをしなくてもいいし、勇者様のぼやきに頭を抱える必要もないんですね。ああ、幸せ……。

ね、ミズさん。どうでした、旅。結局私とあなたが一回も話さなかったけど、ミズさんのおかげで私はここまで来られたと思うんです。本当にありがとう。

……こんな時ぐらい何か言ってくれたっていいじゃないですか。アキさんといい、ミズさんといい、なんでこんなに喋らないんでしょう。

「エンディングで人生終わらないってことは、オレは永遠に生き続けるってことじゃないか」

雄叫びをあげた勇者様は、そのまま教会から走って出ていってしまいました。アキさんとミズさんがその後にはびたり続きます。

……エンディング？ なぜでしょう、懐かしい響きです。

あれ。おかしい、です。

なんで、私は勇者様の後に続かなかったのでしょうか？

……いや、むしろ、どうして今まで、勇者様の行くところどこにでもついていったのでしょうか。冷静に考えて、いくらパーティーだからといっても四六時中一緒っていうのは変です。しかも、びったりと後ろにくっついて列になるなんて。変ですよ。

確か、最初にそれが崩れたのは、あなたと話すの

に夢中になって、遅れそうになったときで……。

あれ。

あなた、誰ですか？

あなた、誰ですか？

もしかして、いつか勇者様が言っていた『みえな いだれか』ですか？

あ、そっか。そっかそっか。そういうことなんです。ね。

勇者様。やっとあなたの気持ちが分かりましたよ。

「プログラムのクセに、ですか」

あのとき勇者様が言っていた言葉。それを口にしたら途端、私の世界は崩れはじめました。

なるほど。確かに、死にたくても……死ねませんね、これでは。

私も、死ねないのです。ね。

ねえ。殺してくださいよ。それぐらい、私達を今まで操っていたあなたなら、簡単でしょう？

クリアデータがもつたいないのでしょうか。ま、そりゃあそうですよね……。

勇者様……私も、今たまらなく死にたいです。一緒に、逝きたいです。

……神様。どうか一度ぐらい、私達自身の意思で、私達のことを決めさせて……。

どうか……。

(フリーズ)

(リセット)

(タイトル画面)

[illegible]

(メニュー画面)

『おきのどくですが ぼうけんのしょ1は きえてしましました』

『ぼうけんのしょ2を よみこみますか？』

▼はい

いいえ